

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：32506

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13807

研究課題名（和文）中小企業の社会的責任論：ソーシャル・キャピタルからのパフォーマンス評価

研究課題名（英文）Corporate Social Responsibility in Small and Medium Enterprises: Performance Evaluation from Social Capital Perspective

研究代表者

横田 理宇 (YOKOTA, Riu)

麗澤大学・経済学部・准教授

研究者番号：20774269

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ソーシャル・キャピタル理論の枠組みから中小企業の企業の社会的責任（CSR）活動を捉えることで、CSR活動が企業のパフォーマンスに与える効果を考察した。従来のCSR研究では、ステークホルダー理論によってパフォーマンスへの影響が説明されてきたが、この枠組では、中小企業のCSR活動は、慈善活動やコストとして認識され、パフォーマンスへの影響を捉えにくかった。本研究では、ソーシャル・キャピタル理論を分析フレームワークとして用いることで、中小企業のCSR活動がパフォーマンスに及ぼす正および負の影響とその発生メカニズムを検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通じて、中小企業の地域社会に対するCSR活動は、ソーシャル・キャピタルの蓄積による経営者ネットワークの形成を通じてパフォーマンスに正・負の影響を与えていることを明らかにした。これらの影響は、CSR活動を通じて獲得されたソーシャル・キャピタルだからこそ発生する（少なくとも、影響度合いが強まる）ものであり、本研究によって、CSRの議論におけるソーシャル・キャピタル理論の適応可能性と有用性が示された。

研究成果の概要（英文）：This study examines the effect of SME CSR on firm performance from the social capital perspective. Previous CSR research has explained the impact of CSR on performance through stakeholder theory. However, in this framework, SME CSR have been understood as philanthropic activities or costs, and the impact on performance has been difficult to identify. Employing social capital theory as an analytical framework, this study examined the positive and negative effects of CSR activities of SMEs on their performance and the mechanisms by which these effects occur.

研究分野：企業の社会的責任（CSR）

キーワード：中小企業 企業の社会的責任（CSR） ソーシャル・キャピタル ネットワーク

1. 研究開始当初の背景

企業の社会的責任 (CSR) がパフォーマンスにどのような影響を及ぼすのか、また、それはどのようなプロセスによってもたらされるのかは研究者や実務家の大きな興味の対象となってきた。この分野の先行研究を概観するならば、近年、CSR 活動は概ねパフォーマンスに貢献すると議論されており (e.g., Orlitzky, 2008, Pelozo, 2009), その過程には、従業員や消費者に対する魅力の提供や不祥事の際の社会的制裁のリスク低減などがあるとされる。すなわち、ステークホルダー理論の枠組みから、CSR にはステークホルダーに対するシグナリング効果があり、企業評価やイメージ向上に繋がるため業績に貢献すると議論される。しかし、先行研究で得られた知見の多くは、主に大企業を分析対象として得られたものであり、シグナリング効果が想定しづらい中小企業においては、業績に影響する過程が捉えにくく、多くの場合、経営者の自発的慈善活動やコストであると認識されてきた (Jamali, Zanhour, & Keshishian, 2009)。

中小企業の CSR に関する先行研究では、中小企業は地域に埋め込まれた存在であり、その活動の多くが、経営者が持つ個人的ネットワークに依存して行われることから、中小企業の CSR 活動にはソーシャル・キャピタルへの投資という側面があるとの報告がある。従って、中小企業の CSR 活動をソーシャル・キャピタル理論の枠組みから検討する必要性が指摘されている (Russo & Perrini, 2010; Spence, Schmidpeter, & Habisch, 2003)。日本の中小企業の CSR 活動を調査した、申請者らによる先行研究 (田中・横田, 2017) においても、その CSR は、地域の経営者ネットワークを通じて行われることが明らかになっている。すなわち、中小企業の CSR 活動には、地域社会における信頼関係の構築やネットワークを通じた情報交換、協調行動など、ソーシャル・キャピタルを構成する要素が含まれており (Spence et al., 2003), ソーシャル・キャピタルの蓄積を通じてパフォーマンスに貢献する可能性が示唆されている。しかし、ステークホルダー理論ではこの点を十分に説明できなかったため、中小企業の CSR 活動は慈善事業やコストとして捉えられてきた可能性がある。さらには、中小企業の CSR 活動をソーシャル・キャピタルの視座から検討する既存研究においては、主にソーシャル・キャピタルのもつ正の効果にのみ焦点を当てており、ネットワークによる拘束など負の効果については議論が不十分であった。

本研究では、こうした背景のもと、ソーシャル・キャピタル理論を分析フレームワークとして、中小企業の CSR 活動がパフォーマンスに及ぼす正および負の影響とその発生メカニズムを検討するものであった。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、中小企業の CSR 活動を起点としたソーシャル・キャピタルの蓄積がパフォーマンスに正の影響を与えるかどうか、また、与えるのであれば、どのようなプロセスによって与えるのかを確認することであった。Russo & Perrini (2010) や Spence, Schmidpeter, & Habisch (2003) らの指摘に代表されるように、中小企業の CSR 活動にはソーシャル・キャピタルへの投資という側面があるためソーシャル・キャピタル理論の視点から検討する必要性を指摘する研究はあるものの、実際にその関係やプロセスを調査した研究は少なかった。したがって、本研究によって当該の関係性を明らかにすることを試みた。

本研究の第二の目的は、中小企業の CSR 活動を起点としたソーシャル・キャピタルの持つ負の側面を明らかにすることである。これまで、中小企業の CSR 活動は慈善事業でありコストであるという議論はあったものの、CSR によって蓄積されたソーシャル・キャピタルがどのようにパフォーマンスに負の影響をもたらすのか、そのプロセスを検討した研究は見当たらない。Spence et al. (2003) に代表されるように、中小企業の CSR 活動をソーシャル・キャピタル理論によって検討する必要性を指摘する研究は、地域社会における信頼関係の構築やネットワークを通じた情報交換、協調行動など、ソーシャル・キャピタルの持つ正の側面に焦点を当てたものであり、ネットワークに拘束され企業活動が制約されてしまうケースや、ソーシャル・キャピタルを悪用した他社による知識移転や出し抜き行為など、負の側面についての議論は不十分であり検討する必要がある。そこで、中小企業の CSR 活動を起点としたソーシャル・キャピタルの蓄積がパフォーマンスいかに負の影響を与えるかを確認することを第二の目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、ソーシャル・キャピタルの視点から、中小企業の CSR 活動がパフォーマンスに与える影響およびそのプロセスを明らかにすることを目的とするが、この種の実証研究はほとんど実施されていない状況であり、どのようなメカニズムが存在するのかが明らかになっていなかった。そこで、まずは、ソーシャル・キャピタル理論の分野において、ソーシャル・キャピタルの持つ正の側面と負の側面について検討した研究や、ソーシャル・キャピタルの関連概念であ

る社会ネットワークの研究分野において、中小企業の特徴ともいえる企業家ネットワークの視点からパフォーマンスとの関係などを説明している文献を渉猟し、中小企業の CSR 活動を起点としたソーシャル・キャピタルの蓄積がもたらす正・負の影響の発生条件に関する理論的検討を行った。そのうえで、文献レビューから導き出した理論的記述が実際の現象においても観察されるのかどうかを確かめるべく、半構造的インタビューやフィールド調査等の手法による探索的研究を行った。

事例調査にあたっては、ある程度日本において平均的な産業構造を持つ都市である群馬県高崎市で活動する中小企業を調査対象とした。調査の実施に際しては、各社の基本情報を収集した上で経営者に対するインタビュー調査を行うとともに、フィールド調査として、各企業や経営者が実施者として参画するイベントや企画会議へオブザーバーまたはボランティアとして参加し活動を観察した。

分析対象とする活動については、従来のステークホルダー理論による説明ではその特徴を最も捉えにくかった地域社会に対する CSR 活動を分析の対象とした Jamali(2008)や Spillar(2000)によれば、地域社会に対する CSR 活動には、地域に対する寄付・投資、教育・研修のサポート、地域イベントへの参画、地域でのボランティア、地域社会や環境の改善、フィランソपी、地域の効率化への寄与、環境・社会的負荷の公開などがあるが、本研究では、中小企業の CSR 活動を起点とするソーシャル・キャピタルの蓄積に注目することから、各経営者が所属する経営者団体や青年団体を通じた活動、団体を越えたメンバーが集まり実施される活動としての当該地域のお祭り、および、グルメイベントの3つを観察対象とし、そこで蓄積されたソーシャル・キャピタルが、どのようなプロセスで、どのようにパフォーマンスに影響を与えているのかを観察した。

4. 研究成果

本研究を通じて、中小企業の地域社会に対する CSR 活動は、ソーシャル・キャピタルの蓄積による経営者ネットワークの形成を通じてパフォーマンスに正・負の影響を与えていることを明らかにした。まず正の影響としては、「観察・学習」や「新たな事業」の機会があり、前者においては、「他社の観察や交流による学習と情報の獲得」「密なコミュニケーションによる仕事の質の向上」「社会貢献活の社会実験の場としての活用」が、後者においては、「ニーズの把握による新規ビジネス機会の発見」「マッチングによる新規ビジネス機会の獲得（新規案件の受注・協業）」「ビジネス活動では繋がれない人脈の獲得」が観察された。次に負の影響としては「ネットワークのしがらみ」および「ネットワークの維持費用」があり、それぞれ、「ネットワークからの離脱による地域での評判低下」「ビジネスの橋渡しに伴う事業機会の喪失」「返報によるしがらみ」、および、「ネットワーク内でビジネス活動を行うことによる市場競争力の低下」「活動による時間の拘束とビジネスにおける機会損失」「時間の共用による組織の境界の曖昧化」が観察された。これらの影響は、CSR 活動を通じて獲得されたソーシャル・キャピタルだからこそ発生する（少なくとも、影響度合いが強まる）ものであり、本研究によって、CSR の議論におけるソーシャル・キャピタル理論の適応可能性と有用性が示された。

すなわち、CSR 活動によってネットワークが形成されるのは、自社の利益にならないイベントの成功という共通の目標に向かって経営者たちが共に取り組むことがソーシャル・キャピタルへの投資という意味合いを持っており、その結果として、ソーシャル・キャピタルが蓄積され、ビジネスで活用できるネットワークの形成に繋がっていることが明らかになった。地域貢献活動に参加する中小企業経営者は、これら活動に自発的に参加しており、活動するメンバーは「仲間」であることから、通常の事業活動に比べて信頼関係が構築されやすく、ネットワークが形成されやすいものと考えられる。この点はネットワーク形成に関する研究への新たな貢献である。

その一方で、獲得したソーシャル・キャピタルを維持するためには時間の拘束というコストが必要であり、ネットワークを維持するために時間を使うのか、実業を行うために時間を使うのかのトレードオフが存在することも明らかとなった。中小企業では多くの場合、ネットワークの維持のために時間を使うのは経営者であることから（Spence et al., 2003）、経営者が会社を不在にしても、業務が遂行されるような組織作りが必要であり、経営者が業務を回しているような状態であると、維持費用が増大した結果、業務の遂行が困難になるという負の影響が明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 横田理宇・田中敬幸	4. 巻 53
2. 論文標題 中小企業の地域社会に対するCSR活動が業績に貢献する過程	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 組織科学	6. 最初と最後の頁 pp. 53-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11207/soshikikagaku.53.1_53	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横田理宇・田中敬幸	4. 巻 36
2. 論文標題 中小企業の地域社会に対するCSR活動の光と影：ソーシャル・キャピタルの視点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 経営哲学論集	6. 最初と最後の頁 pp. 37-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 横田理宇
2. 発表標題 現代経営学と道経一体論の対話
3. 学会等名 オンライン道徳科学研究フォーラム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横田理宇
2. 発表標題 現代経営学と道経一体論の対話
3. 学会等名 令和4年度道徳科学研究フォーラム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 横田理宇
2. 発表標題 中小企業の地域社会に対するCSR活動の光と影：ソーシャル・キャピタルの視点から
3. 学会等名 モラロジー研究所道德科学研究センター研究ゼミ
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横田理宇・田中敬幸
2. 発表標題 中小企業の地域社会に対するCSR活動の光と影：ソーシャル・キャピタルの視点から
3. 学会等名 経営哲学学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横田理宇
2. 発表標題 大企業のCSRに関する取り組みが中小企業の経営に与える影響
3. 学会等名 令和2年度道德科学研究フォーラム
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 犬飼孝夫・横田理宇・宗像俊輔・中山理	4. 発行年 2023年
2. 出版社 モラロジー道德教育財団道德科学研究所	5. 総ページ数 97
3. 書名 令和4年度オンライン道德科学研究フォーラム 現代社会問題に対するモラロジーのアプローチ	

1. 著者名 高浦康有、藤野真也（編著）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 白桃書房	5. 総ページ数 264
3. 書名 理論とケースで学ぶ 企業倫理入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	田中 敬幸 (TANAKA Takayuki) (30727722)	拓殖大学・商学部・准教授 (32638)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------